

國學院大學學術情報リポジトリ

神道の連続と非連続：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, エルマコーワ, リュドミーラ, ブロトンス, アルノー, ランベッリ, ファビオ, エバソール, ゲイリー・L, アントーニ, クラウス, 川村, 邦光, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000504

セッション3

〈発題5〉

神道と国体

—政治的イデオロギーとしての連続性を中心に—

クラウス・アントーニ



【司会 (井上順孝)】それでは始めさせていただきます。最後の発題をしていただくのはクラウス・アントーニさんです。アントーニさんはドイツのテュービンゲン大学で、日本文化について幅広く教えていらっしゃる。先生のお弟子さんも日本には何人かいらっしゃる。ドイツの若手研究者をいっぱい育てていらっしゃる。昨年、ドイツにうかがったとき私自身も非常にお世話になりました。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

発題

クラウス・アントーニ

テュービンゲン大学のクラウス・アントーニです。国学院大学のシンポジウムにお招きいただきまして、とてもありがたく思います。

1 はじめに¹

「神道」というテーマは日本の文化史の基本的な問いに属している。その際神道は日本の内外でこの国の国民宗教として見られているだけでなく、しばしば日本文化の不変性、それどころか日本という国の本質すなわち「国体」そのものの不変性の隠喩だとすら見なされているのである。この広く行き渡った見方の通俗的な例として、ジョゼフ・M・キタガワ(Joseph M. Kitagawa)が『日本便覧』の中に書いている記事を引用してみよう。

「神道」は本来の意味で日本人の基底にある世界観である。というのも神道は多様であるとともに唯一無二の日本的な感性、宗教的確信、そして文化的な態度の複合であり、それは太古より今日まで日本人の体験を規定してきたからである²。

この定義においては、歴史的な側面の捨象が可能だと考えられており、歴史抜きで妥当する神道というものを考察的方法的な面で無造作に措定してしまっている。しかしながらそこには大きなディレンマが含まれている。神道という宗教システムこそまさに歴史的に生成してきたものであり、宗教的土台の上に立つ日本の近代ナショナリズムイデオロギーすなわち「国体神道」に至るまで、その長い発展の過程で多種多様な要素が合わさったものではなかろうか。

キタガワ他の論者が措定するような普遍的に妥当する日本の「国民宗教」というものは、単に願望の像としてまた近代の構成物として以外には検証のしようがない。ミヤサカ・マサヒデはこの点に関して、「神道」という言葉は狭義の宗教を表すものとしてのみ使用すべきだと、限定的な発言をしている。彼はさらに「これに対して「神道主義」という概念はイデオロギー化ないし政治化によって成立した神道主義的方向を持つ社会・国家思想についてのみ用いられる³」とも述べている。しかし私見によれば、純粋な民族宗教という意味で政治的に汚れていない神道と、イデオロギーに汚染されたその否定的な対応物としての

近代神道主義とをこのように区別することは、精神史的な事実を見誤らせてしまうものだと言えよう。政治的な位相は最初から「神道」というシステムを構成するものであり、それを理想化された宗教から分離することはできない。両者は同じメダルの両側面なのである。

学術的たることを標榜する著作の中でミヤサカが一見価値自由に見える主張をなしているというこの事実こそが、このテーマについての歴史的批判的な研究が今日不可欠だということを示している。

いわゆる「神道」なるものを取り扱うほど日本の文化とその自己理解への問いを意味しているテーマは他にない。民族宗教か近代の構築物か。古代的な祖先崇拜か日本的なフォークロアか。秘教的な教理宗教か習合的な儀礼制度か。そして最後に、自民族中心主義的なナショナリズムか平和的な自然崇拜か。いわゆる「神道」を巡る議論ほど日本文化についての紋切り型のイメージが見られるテーマは他にないであろう。近代のイデオロギー的發展の中で神道は「真性の」、「等質的な」、「無類の」そしてついには「本来の」日本文化を元々象徴するものとしての機能を持たされてきた。あらゆる外来のものから浄化されるならば、そこに真の日本の姿を見せてくれるとされたのである。その限りで外来のものすべてから密かに解放された日本の民族宗教という要請は、既にそれ自体こうした日本近代の自己ステレオタイプの産物でもある。このステレオタイプは文化的自己表現として真正なものだと思われることによって、外国に於いてもまた日本像を今日まで規定し得ているのである。

全体として明らかなように、神道は自らをあたかも日本の自然な「民族宗教」であるかの如く描き出そうとしてきたのだが、その評価は歴史的発展の正確な検証なしには不可能だと言えらるう。

2 宗教と価値：信仰宗派ではなく「習合」

日本の精神史・宗教史の目立った指標として、多くの場合寛容さが際立っていること、この寛容さが諸宗教の関係を伝統的に特徴づけていることが挙げられる。そして実際、明らかな宗教対立の時代というのは、歴史上稀であった。ただし中世における日蓮宗の側からの折伏、あるいは近代における強引な「神仏分離」や、また明治時代以後の独善的国家神道などの例外はあるのだが。しかしそうした例外を除いては、特に3つの、それぞれがまた多様性と不均質性を内に抱える精神的宗教的システムが互いに併存・共存してきている。したがって日本においてはヨーロッパと異なり、信仰上の狂信性というのはほとんど知られていない。むしろ習合という思考枠組こそが、多様な文化的同化の形態を伴いながら、日本の宗教モデルの基本型を示しているのである。

しばしば際どいとさえ思われるような論理構成や思弁によって、例えば、神道の土着の神々は仏教の高次の存在と同一視され、高次の精神的地平において根本的には互いに同一のものだと思なされてきた⁴。今日の日本も相変わらず基本態度において習合という特徴を強く帯びていると言える。とりわけ多くの新宗教、新々宗教は結局は伝統宗教の舞台装置

から借用する形で、例えば仏陀と天照大神が孔子やそれどころかイエスともまた共存できるような、しばしばびっくりするような宗教体系を新たに作り出しているのである。こうした思考の根底にあるのは、単純素朴さや宗教的無頓着とかいったことではなく、高次の次元ではすべてが互いに相互作用の関係にあり、交換可能だという、偏に習合的な根本確信なのであろう。今日習合現象は以前にも決して盛んであるように見える。

これに対し、一神教的なキリスト教は、日本の社会と文化の中では、規定的な要因の一つとして影響力を持つことはできなかった。戦後日本ではキリスト教信者団体は確かに自由な展開をとげることはできたが、しかし社会的には今日小さな役割しか演じていない。日本のキリスト教徒がまさに高度に政治的な問い、例えば天皇の戦争責任についてのそれを繰り返し表明しているにしてもである。したがって日本の精神的基礎を理解するにあたっては、相変わらず3つの伝統的システム、すなわち仏教、儒教、神道が鍵となる役割を担っていると言える。なぜならほとんどすべての宗教的、倫理的な観念世界において、この3つの宗教はその都度多少なりとも創造性を持っていたからである。私見によれば、その際神道は宗教と国家の領域をとりわけ天皇という制度において結びつけており、仏教は念仏仏教と禅が両端を担うことで宗教と倫理の橋渡しをしており、最後に儒教は倫理と国家の領域を結合して円環を締めくくっていると見えよう。

2.1 神道

以上のように所与の枠内の整理では極めて手短か且つ大雑把な言及しかできないが、続いて問題の範囲をもう少し絞ってみることにしよう。仏教や儒教というシステムと同様に、神道というシステムには歴史的に条件づけられた断続と内的不均質性が存在するのだが、それにもかかわらず、神道には総じて連続性を示す指標が明らかに見受けられる。

ここでまず第一に注意を向けておくべきなのは、神道においては無数の神々が崇拝されており、礼拝においては共同の祭儀に中心的な意義があるということである。筆者にとって根本的な意味を持つように思われるのは、神道の「カミ」とは決して霊や魔物といったものについて語っているのではなく、事実「神の属性」について語っているのだということである。比較宗教民族学的観点からすれば、「カミ」概念が畏怖の念を起こさせる神性的性格を持っていることは疑う余地がない。しかしこのことが直ちに西洋的、一神教的な意味での神理解を意味するものでないことは銘記しておくべきだろう。神道の礼拝場所として使われるのは「神社」ないし「社」であり、それはしばしば具象的、物理空間的な意味で神の属性を持ったものの「家」と理解されている。すべての神社の入り口はたいいていは木造の鳥居によって境界づけられており、これはまたしめ縄と対になって聖所をその周囲の俗世界から区別している。

神道の倫理観念の本来的な核は、あらゆる生活領域を貫いている清らかさという思考に見い出すことができるだろう。病氣と死は根本的に不浄とされ、したがって広範な忌避の対象になる。したがって死は神道教義学上の問題とはほとんどなりえず、これは仏教によって取り上げられることになったのである。

伝統的に神道の思弁の中心をなすのは天皇という制度である。江戸時代以降、ここから「国体」という観念が、宗教的、文化的に基礎づけられた特殊日本的な国民国家理念として発展してきた。ここで特に説得力を持って見えてくるのは、「神道」という複合的システムは、以後やや詳しく見ていくように、明瞭な歴史的発展を辿ってきたのだということである。近代を理解するために必要不可欠な前提として、ここでは古代と前近代の発展を重要な基本線だけに限って述べていくことにする。

2.1.1 歴史的発展

神道の歴史の短い旅をまずは別の定義から始めてみよう。それは均質で宗教的な自民族中心主義とはまったく別のものである。引用すると、

「神道は……広義には日本の原宗教であり、狭義には原宗教と中国的要素とから政治的目的のために構築されたシステムである。」

日本のいわゆる民族宗教について、大林太良はこのように定義づけている。この定義を我々の考察の出発点に据えるならば、そこには暗に2つの問いが提起されている。一つは日本の「原宗教」という言葉で何を理解すべきか。2番目には「政治的目的」ということで何が考えられているのか、ということである⁵。

さしあたり史料の上で可能な限り時代を遡ってみることにする。ここで鍵となる位置を占めるのは、日本の最古の文字伝承記録、すなわち712年の『古事記』と720年の『日本書紀』である。その性格上歴史書として書かれているこの2つの作品は、この国の歴史を神話的な初源から始めてこの文献が成立した時代に至るまで叙述しており、そのことによって当時の公式の歴史理解についての情報を与えてくれるのである。この2書、特に『古事記』は、近世の伝統的な神道家の間ではいわば神道の「聖典」としての扱いを受けてきた。こうした事情はいかに説明されるのであろうか。

2.1.1.1 「日本の原宗教」

日本に仏教以前の宗教形態が存在したという事実はもちろん疑う余地がない。但し明白でとりわけ統一的な像を描き出すには、史料状況がほど遠いということは見過すべきでなかろう。そのための情報は伝承記録から苦労して取り出され、解釈されねばならない。こうした問題状況に関する基礎的研究は、ネリー・ナウマン(Nelly Naumann)が日本古代の宗教についての研究で行なっている。考古学的研究からも、例えば埋葬様式から彼岸に関する特定の観念が推測されうるなど、一定の帰結を引き出すことができるが、これと並んで理解の手掛かりを与えてくれるのは、『古事記』と『日本書紀』という古い史料の神話である。7・8世紀の国家指導層が天皇支配を正当化する目的で、一つの秩序立った体系に仕上げたのは、まさにこの神話群であり、そしてその個々の要素は、日本の最初期の信仰観念すなわち「日本の原宗教」についての貴重な認識を可能にしてくれるのである。

歴史的な分析が示すように、『古事記』の神話が神道家やイデオログによって日本の聖なる伝承の地位にまで高められたのは、ようやく後代になってからのことに過ぎない。江

戸時代の国学が掲げたような統一的な「原宗教」なるものは、古い書物からは読み取ることができないのである。いわゆる「神道」は、知られている限り、その歴史の黎明期においては、玉虫色の多彩な衣を纏って現れている。ここではまだ日本の均質な「原宗教」という構築物は考えられていない。史料の詳しい分析が示してくれるのは、当時の神話伝承が持つ不均質な性格と、その出自の多様性であり、これらはようやく8世紀の官製の編纂事業によって、唯一の一貫した伝承へと成型されていくのである。

これに関して注目すべきことは、上述後者の『日本書紀』においては、神話の題材が『古事記』に比べて本質的に細分化された形で記されていることである。『古事記』では全体が唯一の持続的な合目的的行為として記述されているのに対し、『日本書紀』ではたいてい複数の互いに異同のある伝承が、特定の行為の挿話として等しく全体の中に組み込まれている。『日本書紀』に数多くの変形挿話が含まれていることから、当時数多くの伝承が知られており、それらは互いに大きく相違していた可能性があるということが分かってくる。唯一で一様の伝承という主張は近世の国学によって持ち出され、明治時代に神道の教義として確立したのであるが、これは何よりもまず『古事記』にその典拠を求めており、当初から一つの幻想を、つまり政治的な正当化の目的で人為的に造られた何ものかを定立していたわけなのである。

「唯一無比の国体」という近代日本のイデオロギーは、つまるところ偏に8世紀の史料に伝わる神話の正当化言明に依拠しているのである。諸神話の客観的学問的研究、特に大林太良やネリー・ナウマンらがやったような比較民族学的研究は、一連の事例で分かるように、明治時代から1945年まで神聖不可侵とされてきた国家理解と必然的に衝突せざるを得なかった。例えば自国の神話が大陸や南方諸島の伝承と系譜的につながっていることを証明するだけでも、自己充足的な「神国」日本という信仰箇条を揺さぶるものであったわけだ。

したがって戦後と共に始まる自由な学問的神話研究が持った啓蒙的な効果を、過小評価することはできないだろう。中でも松村武雄、ネリー・ナウマン、大林太良等の批判的・文化史的分析がなかったなら、近代国家神道の独善的な定理は或いは今日でも検証されないままでも通用していたかもしれない。日本文化はその発生から高度に複雑で歴史的に階層化されたものだったということを認識させてくれたのも、また日本文化の起源についての問いを1868年以後の近代の中で人為的に造られてきた孤立から救ってくれたのも、またそれを東アジアだけでなく、普遍的な人類史の総合的連関の中に置いてくれたのもこれらの研究だったのである。日本の「均質性」というイデオロギー的な理念は、これによってもはや維持し得ないものとなっている。日本は地理的には「島国」であっても、文化的にはそうではないのである。

2.1.1.2 天皇家の正当化

「古事記」及び「日本紀」の最初の章は、大林が言うところの「政治的目的」という問題に関して特別の意味を持っている。そこには上述の神話伝承だけでなく、宗教的拘束力を

持った「公式」の神道の基礎観念も含まれている。そこに見られるのは世界の成立、神々とその業、天皇家とその権力の安定の起源についての記録である。

同時に既にそこには日本の神話解釈のある特徴が示されている。それはつまり特に天皇家の権力を正当化する目的に奉仕するということであり、そのことによって実際明らかな「政治的目的」に役立っているのである。

中国の儒教的国家論の中心にあるのは、常に「天子」という理想的な支配者に治められた理想的な国家であった。しかし儒者が根本的に確信するところでは、国家の安泰を実現できるのは、真に徳のある支配者だけである。なぜなら支配者と国家とは神秘的な関係で深く結び付いているからである。皇帝がその個人的な徳を失って正しい道から外れるならば、民は国家全体にとって直接的に危険な存在となった支配者を打倒する権利のみならず、實際上その倫理的義務をも負っている。こうした考えをはっきりと代表するのは孟子であるが⁶、それは日本に中国的思想が入ってくるのに従って、古代の日本にも到達していた。

特徴的なことは、まさにこの点、すなわち皇帝を廃位し得る潜在的な可能性こそが、日本が中国の例に倣おうとしなかった点だということである。やがて「天の支配者」を意味する「天皇」と称するようになった日本の王は、自らを中国の皇帝と同列だと考えており⁷、大和朝廷においてその権力正当化の独自の形態を計画的に案出していくことになる。そしてそれは儒教とは意識的に一線を画すものだったのである。

天皇家が天を起源としており、また生身の天皇は太陽神の直接の子孫だとする支配者一族の伝承神話の中に、こうした正当化を見いだすことができる。それによれば太陽神はその孫とさらにその子孫、つまり最初の生身の天皇に神勅を与え、日本国を支配すること、それも永遠にただ一つの王朝において支配することを命じた⁸。中国のような王朝の交代は決して行なわれてはならず、この支配権は決して手放してはならないのである。国家自体が形式上中国化すればするほど、朝廷においては特殊日本的な支配者像が作られていった。この場合の支配者とは、神的な存在それ自体の神的な子孫という意味であり、この神的子孫ないしはその神的な祖先からすべてのものが由来し、その意味を受け取るような性格を持っている。このような天皇の神格化とその帰結として日本全体の「神国」としての神格化は、「神道」すなわち「神々の道」という言葉で表されているものの本質である。ネリー・ナウマンが既に1970年に次のように述べている⁹。「『神道』という言葉の意味は、日本の神格的天皇の理想像の中に具体的に把握されており、それは支配する天皇の神格性とそれが太陽神から与えられた支配の委託とを含んでいる。」

日本ではようやく中世になって独自の神道教義学が発展してくる。天皇は確かに武士と「幕府」の前に直接的な支配権を失い、そして名目的に天皇家の名において支配を行なった「幕府」は1868年に至るまでその支配を維持していた。しかし神道学者の間では日本は神々の特別の庇護下にあるのだという「神国」観念がますます表立って現れてくるようになる。そうした考え方の中でもラディカルな論者は、伝承された神話から天皇家の神としての由来を引き出すだけでなく、ついには日本民族全体が神々に起源を持つとまで主張するようになる¹⁰。そうした人々にとって日本はその本質において地上の他のあらゆる民

族から区別され、唯一無比の固有の精神たる「大和魂」を持った国なのである。このような基礎の上に、遅くとも 18 世紀には神道学は新たに政治化の道を辿ることになる。

3. 近世と近代の神道

3.1 儒家神道

こうした道程の出発点をなすのは、神道と儒学の習合ないしは儒家神道である¹¹。中世の仏教的神道は、理論的教義学的地平において江戸時代の間に儒家神道に大幅に取って代わられることになった¹²。「神儒一致」という神道と儒学の統一の理念は¹³、朱子学を精神的核に据え、仏教に対しては明白に拒否の姿勢を取っていた。いわゆる「廃仏」の思想である。このような新しい儒学志向の神道を代表する思想家には、藤原惺窩、林羅山といった当時最も影響力のあった儒学者が含まれる。さらに中世から存在する度会神道または伊勢神道¹⁴、そしてまた特に吉田神道の教義体系も江戸時代には儒教的に解釈変えされるようになり、このことを通じて新たな権力関係に沿う形で成長していったのである。吉田家は新しい政治社会構造に寄り添うことで、江戸時代初期の神道の発展を規定することになった。この点で吉田神道の教義は一貫した発展を辿り、ついには近世的儒学的な刻印を受けた神道となって、中世の創始者である吉田兼俱の教義とは似ても似つかぬものにまで変質したのである。

吉田家はそればかりでなく、当時の神社システムにおける独占的な権力的地位、及び徳川家の権力中枢への急速な接近をもとに、江戸時代の神道にとって傑出した意義を持つことになった¹⁵。

3.2 国学

近世の儒学自体と共に飛躍を見た儒家神道は、一方で江戸時代神道の主流となった¹⁶。しかし他方では江戸中期以降、次第に「国学」的な新たな神道解釈が形成されてくる。国学は日本の中国化が進むことに対する反動として現れてきた。その代表者としては荷田春満(1668-1736 年)¹⁷、賀茂真淵(1697-1769 年)¹⁸、本居宣長(1730-1801 年)¹⁹、そして最後は平田篤胤(1776-1843 年)²⁰にまで行き着くのだが、この学派は当初は純粋な文献学的、文学的な方向性を取っていたものが、江戸時代の間に意識的に政治的、煽動的な論証をしていく、そういう理念を志向するようになってきた。

国学がその研究対象として選んだのは主に日本古来の文献だった。日本古代の文献研究は賀茂真淵の弟子である本居宣長にあっては特に「古事記」がふさわしいとされているが、これはその帰結としてこれまでの習合的な神道解釈を脇へ押しやることになった。こうして神道における先験説すなわち哲学的・政治的神道が儒家神道と覇を争うものとして登場してきたのである。

その哲学的教義学的研究に基づいて、国学は 18 世紀末からその見解をいよいよ政治へと移し替えようとし始める。国学のこの試みは、天皇家の血統に関する神道の教義に対応する形で、天皇制の復古をますます考察の前面に押し出すことによって遂行された。

最古の国家年代記の中に伝えられている歴史は「神代」の章も含めて、歴史的な事実であり現実のものだったのだという確信が、国学の理論的公準である。世界の成立、天と地の神々、天皇制の始まり、有力豪族の出自などについて伝えているところの記述は文字通り「事実」として理解された。これらすべての神話の出来事は「国学」の思想家には歴史的な現実として理解されるべきものだったのである。この点で例えば後期国学のとりわけ影響力の大きかった思想家にしてイデオログである平田篤胤は日本を「神国」だと表現しているが、それは「神道原理主義」の意味において、伝承された言葉をそのまま文字通りに受け取るということをやっているわけなのである。篤胤にあってはこうしたものの見方は狂信的なナショナリズム、諸外国に対して日本が特別に選ばれたものだという確信にまでつながっている。彼にとって神々は「人間及ビ万物ヲ造ラシヤル」存在であり、また「神代ト申スコトハ、人ノ代ト別テ申ス稱デ、夫ハイト上ツ代ノ人ハ、凡テ皆神デ有タル故ニ、其代ヲサシテ、神代ト云タ物デ、扱イツ頃マデノ人ハ神デ、何頃カラコナタノ人ハ、神デナイト云フ、際ヤカナル差別ハナイ」のである。そして「皇産霊神ノ御霊ニ因テ、出来ル人ジャニ依テ、其真ノ情モ、直ニ産霊神ノ御賦ナサレタ物デ」、「人間ノ真ノ道」は「邪心ノ出ヌヤウニ修シ齊ヘテ」いけば、「御國人ハ自カラニ、武ク正シク直ニ生レツク」とされる。さらに別の箇所では篤胤は日本の聖性について「又我々踐ノ男シヅノメニ至ルマデモ、神ノ御末ニチガヒ無イデゴザル」と述べている²¹。かくして日本民族もまた神々の子孫の地位にまで高められており、「現人神」である天皇自身の血統に連なるものだと考えられているのである。

3.3 「国体」の概念

国学の思想世界は江戸末期には儒教思想と意外な結合をはたすことになるのだが、ここには再び習合という日本の伝統的構造を見ることができる。幕末期の国学の思考の中心を占めたのは、「国体」の理念であった²²。「国体」という言葉はさしあたりあらゆる国が持っている「その国に固有の性格」を表すものである。しかし今や日本の「国体」は日本が「神国」であり、太陽の女神たる天照大神によって造られ、その直接の人間の子孫である天皇によって治められるという無類の事実に基づくものとなったのである。神格的な天皇はしたがって日本のアイデンティティを体現することになる²³。

歴史的な研究によれば、少なくとも京都の朝廷では「国体」という概念が当時既に日本それ自身と同義語として用いられている²⁴。そしてまたそのことは平田篤胤が「真の神道」は「国体」の中に具現されていると考えたことをも思い起こさせる²⁵。しかしこうした考え方が国教的な国家イデオロギーの形で人々の間に広範に広まるのは、ようやく明治維新以後のことであった。「国体」思想にははっきりと3つの段階を区別することができる。およそ1825年から1890にかけての形成期、1890年から1937年にかけての古典期、そして1937年から1945年の増長期である。

形成期は19世紀初めに始まっており、1825年に書かれた会沢正志斎の『新論』にそれを見ることができる²⁶。この時期は1890年に終わりを告げる。この年には次の発展を決定

づけた『教育勅語』が出され²⁷、第二の古典期が始まることになる。

既にここに挙げた年代を見ても分かるように、この時期は日本史上の最も大きな転換の時期である。徳川幕府が倒れて、開国へと踏み切り、そして憲法を超越し、国家そのものを具現する神聖な国家元首としての天皇を戴いた近代天皇制の創設期にあたっているのである。

このような発展にいわゆる「水戸学」の思想家たちが精神的、政治的に大きく貢献したのは周知のごとであろう。彼らは国学的な解釈における神道の神国理論を拡大し、当時支配的であった儒教の倫理規範を付け加えていった。これは中国的なものを一切拒否する国学の純血主義とは本来的に異なっている²⁸。

この学派は国学の神道的な神国イデオロギーと結びついて、一つの家族主義的な「国体」観念に流れ込むことになった。それは日本民族を共通の神々に出自を持つ一つの家族として、同一の系譜に連なる現実の共同体として定義づけるものであり、天皇は当然にその首長として君臨するわけなのだ²⁹。

3.4 明治時代の宗教とイデオロギー

そういうわけで近代日本の国家思想は、その精神的核をとりわけ均質な家族国家というイデオロギー的、宗教的な要請の中に持っている。この考え方は明治時代以降「家族主義」という観念の中に定式化されてきた。すなわち民がただ一つの大きな家族として互いに結びついているような、そういう国民国家としての日本の観念である。この国民家族の頂点には父の役割を担って天皇が座っている³⁰。注目すべきことは、この家族主義の極端な見解に至っては、天皇と国家人民との親密な結びつきが比喩的な意味での家族として考えられているのではなく、民族的・遺伝的に定義づけられた事実的な血統共同体として理解されていたことである。その成員はいずれも神の祖先の系譜を引くことで、お互い親族的に結びついているというわけなのだ。

とりわけ1890年の『教育勅語衍義』から1937年のナショナリズムの絶頂期における『国体の本義』³¹に至るまでは、神道が宣言したような日本文化の像が行き渡っていた。すなわちそれによれば日本の歴史では、人格及び制度としての天皇が中心に位置づけられており、ほとんど遺伝的に受け継がれてきた「国民道徳」を通じて天皇が均質な国民と不可分に結びついている、そのことによって他に傑出しているのというのである。こうした考えは例えば哲学者の井上哲次郎に見ることができる³²。

この「国体神道」イデオロギーと対立するような歴史的現実の認識は、こうした文脈においては大幅に無視され続けてきた。日本が歴史的発展においては文化的、社会的、領域的そして特に宗教的な点からしても常に多様で分裂していたということは明治時代にはイデオロギー的にしっかりと排除され、民族的文化的に均質な国という新しい見解は「国体」神道の絶対的なドグマにまで昇りつめることが可能になったのである³³。

まさに日本は常に部分集団に分裂していたからこそ、均質性というユートピアは明治時代の新しい中央集権国家の目には多くを約束してくれるものと映ったのだ。こうした文脈

において鍵となる地位を占めたのは神道であり、それはここに至って唯一の真性の日本文化だと宣言されるに至る。必然的にこれは神道が日本文化それ自体を体現しているという考え方に流れ込み、明治後期から 1945 年の崩壊に至るまで日本を規定していったのである。

1946 年 1 月 1 日に昭和天皇が神格を公式に放棄したにもかかわらず、天皇制は相変わらずその全精神的かつ宗教的な権威を神道の宗教的・政治的観念世界から引き出している。世論調査は天皇制が日本人の間で相変わらず人気があることを常に裏付けている³⁴。しかし回答者のほとんど誰も「宗教」を意識していないのである。と言うのも天皇は大方の日本国民にとって、憲法もまさにそう定めているようなもの、つまり日本の「象徴」を意味しているからなのだ。天皇が東京の真ん中にある孤島のような皇居にあって、神秘的に世間から隔離された生活を送っている限り、日本はこうした観念に応じてその内的な統一を保持できるというわけなのだ。

4. まとめ

以上の説明では歴史的発展の詳細に立ち入ることはできなかった。ここでは特に近世と近代の発展をまとめた私の仕事を参照していただければ幸いである。

しかし神道の問題性についてのこの短い概括から、非歴史的で静的なアプローチでは「神道」というテーマの理解と説明に資することはできないという、少なくともそういう印象を読者諸氏には持っていただけることを願って已まない。神道は仏教や儒教その他の複合的システムと同様、明確に定義づけられたり、不変の所与として存在しているわけではない。しかしそれでも「神道」というシステムの連続性を証明する通時的な指標が見て取れるのである。この連続性の核心をなすのは、「古事記」や「日本書紀」の時代以来、天皇家の支配的地位を神道が正当化する役割を果たしてきたことであろう。他のすべてを凌駕してしまうこの「政治的目的」は、我々が「神道」という概念でもって表すもののすべての本質的な核をなしている。そしてこの「政治的目的」は、古代の統一的な神話の構築から、中世の「神国」思想、また国学の先験説による思考実験を経て、近代の「国体」概念に至るまで、途切れることなく神道の歴史を貫通して追求されてきたのである。

従って近代神道の精神構造は、本質的には日本前近代の発展に既に基礎を置いている。それは仏教、儒教、神道の教理的哲学的な思想家たちの間で構想され、明治時代以降は西洋近代の輸入思想と同じく、単にそれを実践に移すということが問題だったのである。神道の世界は従って近代日本の自己像形成に決定的な意味を持っているのである。

コメントと質疑応答

【司会】ありがとうございました。ていねいに文章を作っていたので、理解がしやすいかと思います。国体という近代に生まれた概念と神道との関係、そして、その観念が形成される以前からあった、いわば天皇の位置というもの。こういうものを神道の連続面を理解するときのキーワードとして見ていこうということがお話にあったと思います。

それで、これにコメントをしていただくのは国学院大学日本文化研究所の助手をしている松本久史さんです。ここに出てきた荷田春満の国学の研究をちょうどいま手がけているのでぴったりのコメントがあると思います。よろしくお願いいたします。

【松本久史】国学院大学日本文化研究所助手の松本でございます。いま井上先生の紹介にあずかりましたが、私自身はおもに近世国学の研究者でありまして、今回のシンポジウムは古代から現代にわたる非常に長いスパンのお話ですから、私は十分コメントしきれるかという不安がありますが、よろしくお願いします。

ここで、連続であるか、非連続であるかということを何人かの先生方、コメンテーターの方々と議論が進められておりますが、アントニー先生のお話はある意味積極的に連続性という部分をとらえようとするものだと思います。すなわち、ひとつ天皇という存在を核にしながら、そういう意味での神道というものの連続性があり、それが保証されている。まあ保証されているというか、そういうふうに歴史的に進んできたということを述べられたものと受けとめております。



質問に入らせていただきたいのですが、先生は特に近世・近代のお話を中心にされて、それ以前に古代の『古事記』『日本書紀』というものがひとつ決定的な要素として表れているというお話でしたが、たとえば、先の発表で熊野や『麗気記』が話題にありましたように、中世というのはいったいどのようにとらえられていくのかということがあります。まさに何回もお話が出ていますが、たとえば、黒田俊雄先生の理解、やはり神道というものが仏教のいわゆる「化儀」としてある。そのような状況であった中世において、たとえば、天皇の神格性というものの、それを通じていわゆる国体、日本が神国であるということが保証されているということの中世的な姿はどういうものがあつたのか。そういうものを一足飛びに飛ばして、全否定の形で近世・近代がきてしまったのか。多少、そのあたりの中世に関する先生の見解についてご説明をしていただきたいと思うことが第一点です。

もうひとつは、天皇という——現在でもそうですが——ある意味実際に世俗の政治なり何なりにおいて非常に重要な位置を占めている存在、現在象徴天皇制という形でありながらも、やはり憲法上の存在として一種世俗の存在であり続ける天皇というものと、一方、そうではないレベル、たとえば、天地開闢からありますが、天照大神から天皇につながるという、そういう観念です。そういったものが結びついているあり方は——それは、政治目的をどういうふうにとらえるかということだと思いますが——単に政治的に利用しているというようなことではないと思います。たとえば、そのようなあり方というのは日本は続けている。たしかに、天皇の特異な存在はずっと歴史時代から現在まで続いていることは事実であります。では、国際シンポジウムというせっかくの場でいろいろな外国人の研究者の方々が来ていらっしゃるし、たとえばイスラームの場合と、ここにヒンドゥーのかたがいいらっしゃるかどうかわかりませんが、ヒンドゥーの場合とか、そういったような世界の中でのあり方に似たようなものであるのかとか、全然違うものであるのかとか、そういったことが、いったい存在するのかということのをうかがってみたいと思います。中世の話と外国との比較。この2つにしばって質問をさせていただきます。

【アントーニ】ありがとうございます。とてもむずかしい質問ですが…。中世のことは、神道では歴史的に見ると熊野とか、三輪流神道のことについて私もとても大切だと思います。私は黒田俊雄の説を読みました。これはたいへん重要な説明だと思います。近代や近世の神道がわかるためにそれは大切だと思います。けれども、神道の歴史から、神道の話が中世から近世で始まることはないと思います。

古代を見ると、もちろん中世とは絶対に違うことがわかります。中世の神仏習合はその歴史の全体を見てもものすごく大切だと思います。けれども、本当の連続性を探すと、それはそれほど大切ではないと思います。私の焦点は、伝統の問題にあります。ホブズボーム(Eric Hobsbawm)のいう「伝統の創造／つくられた伝統」(invention of tradition)の問題、これはふつう、文字どおり近代化についての説明であると理解されています。つまり、19世紀の、伝統から国家をつくるための「伝統化」の説ですが、日本の例にもみられるように、この「伝統化」は19世紀だけではなくて8世紀のこともあります。この視点は、神道を理解するための私の視点からすると、最も興味ぶかいものです。

それは、大和朝廷が初めて中国風の国家をつくったときの支配の問題があります。それは一番大切な問題でした。神道を理解するためには、儒教が仏教よりもっと大切だと思います。もちろん、仏教関係は平安時代や中世以降、とてもおもしろいのですが、儒教のほうが大切かもしれません。

私は三輪の研究をしています。三輪にはもちろん、現在は大神神社があります。その大神神社はとても興味ぶかい神社で、神仏分離まで神宮寺があって、神社だけではなくいろいろな仏教の寺もあったりしましたが、それが1868年に神仏分離で大神神社にかわりました。それで、最初はオオモノヌシの神になるでしょう。

中世を見ると、三輪流神道は仏教、密教の思想ですが、中世以前は何だろうか。それは私にとってとても興味ぶかい問題です。たとえば、『古事記』の神話によると、もちろんオオモノヌシの神話を書いてあります。そのときには神仏習合はまだ見られませんが、儒教の考え方はよくわかります。ここに、儒教と神道や神道教理の関係が興味ぶかい問題としてうかびあがります。もちろん、歴史がわかるためには神仏習合も大切ですが、神道と儒教の習合のほうがもうちょっとおもしろいと思います。

そのほか、天皇と政治、現在の憲法問題における存在という点でも日本はものすごくおもしろいと思います。もちろん神道は日本の文化の問題ですが、それだけには限定されない。比較研究の目から見ると、日本で宗教史は宗教の問題がわかるためにたいへん大切ですが、宗教はどの言語の社会、どの言語の時代を見てもいつもアイデンティティをつくり出していました。民族が異なるほかの社会グループがあって、そのグループのアイデンティティをつくるのに一番大切なのは宗教でした。

王や君主の支配を正当化することは——日本の場合は天皇でしたが——それは日本だけにあるものではぜったいありません。それは他の文化でもよくあることです。このような観点から、日本学の分野で日本宗教を研究することは、世界宗教を理解するために大切な問題だと思います。それで、近代でも、いまの日本でも、天皇制は日本文化のアイデンティティのために大切な思想だと思います。だから、2つめの質問、それはだいたい同じことですが、いまイスラームやヒンドゥーは特におもしろい問題だと思います。

たとえば、ドイツのハイデルベルク大学にロトモン先生というインド学の学者がいます。彼は、伝統と歴史について考えました。それから、伝統と歴史だけではない「伝統主義」traditionalism が起こりました。それにはホブズボームのいう「つくられた伝統」と似ている点があり、つくられたことだけではなくて、伝統主義はそれは広い意味での伝統においてはもちろんのこと、そのシステムは、発展がないとされる地域でもさまざまなところでみられます。それから、ひとつの伝統がつくったものは「伝統主義」です。ロトモン先生は、インドの場合でほんとうにうまく説明をしました。千年ほどの伝統から新しい政治的・宗教的なイデオロギーをつくるか、それをどのようにして作ることができるか、それをロトモン先生は「伝統主義」ということばで説明しました。それはとてもおもしろい視点で、私は「伝統主義」の問題が明治時代にもあると思います。ヨーロッパでもそうでした。19世紀末はヨーロッパ、特にドイツでも、本当に明治の思想と似ているところがあり

ます。けれども、日本・ドイツだけではなくて他の国もそうです。いつも、宗教と支配の関係には伝統を使った思想が多い。それは「伝統主義」です。

いまイスラームのことについて話すとしたら、おそらくファンダメンタリズムは伝統主義的な思想かもしれません。よろしいでしょうか。

【松本】 けっこうです。

【司会】 いま中世をどう評価するかという問題と、天皇がひとつの中核になることに関して他の宗教と比べてどうかということですが、最初のほうは連続しているほうを重視したいという微妙なお答えだったと思います。2番目に関しては、どちらかと言えば構造的には普遍的なものとして見ていこうということだったかと思います。

これに関してもっとでもよろしいですし、他の視点からでもけっこうですから、フロアの方からご質問があればお願いいたします。

【新田】 皇學館大学の新田と申します。3点ほどおうかがいしたいと思います。1番目のポイントは、先生はいままで非連続のところだけ問題になっていた連続性にポイントを置かれ、それは天皇の存在を正当化するところに神道の主張があるとおっしゃいました。それでは、日本に入って来た他の思想は天皇支配を正当化していなかったのかという問題です。それは神道だけの特徴といえるのか。このことを1点おうかがいしたいと思います。

それから、国学に関して、習合的な神道解釈を脇へ押しやっていった。そして、幕末には国学の純神道的な国体なるものがきたというふうにいわれました。そうすると、国体ということばは何か純神道的なもののように先生はお考えになっていらっしゃるようですが、はたして国体ということばが本当に純神道的なものとして水戸学から明治・大正・昭和と使われたのかどうかということが二点めです。

それから今日のお話の連続性という点で、それも近代に関しては国体という概念を使われましたけれども、はたして、たとえば教育勅語、あるいは大正時代の国体の解釈から言って国体ということは常に神道の連続性を表現することば、あるいは概念として用いられたといえるのか。この3点をおうかがいし、意見があればまた申し上げたいと思います。

【アントニー】 ありがとうございます。日本に入ってきた思想のなかで、一番大切なのは儒教だと思います。そのときに古代5世紀、6世紀に、もちろん仏教も儒教もともに日本に入ってきたのはみなよく知っていますが、儒教は国家づくりのために一番大切でした。儒教文献は、当時における「近代化」の文献でした。8世紀の「近代化」は儒教による「近代化」でしたが、そのときまで日本の島にはいろいろなたくさんの地方のクニがありました。そのときに、儒教の文献には新しい大きな国家をつくる制度がありました。その考えのなかでは、その制度をどのように正当化できるのかが一番大きな問題とされています。

もちろん、中国哲学では、それは天子、一私の発表で話しましたが一天子の個人的な徳でした。それは、日本の国のウジ社会のなかでそれは無理でした。そのために、日本では徳のために系譜の制度が起りました。『日本書紀』神代巻の系譜は、天つ神から支配の正当化をするものでした。それは、私の見方からすれば、中国思想と古代日本国家の思想のあいだで一番大切な相異点です。中国は個人的な徳、日本では宗教的な、とにかく神話

な系譜の考えです。それは、私の見方によれば、一番大切なものだと思います。

その後は、国体のことはもちろん、言葉はだいたい新しい。水戸学の会沢正志斎が『新論』で1825年に初めて使ったことばです。文献で見ると平安時代に「国体」ということばがありましたが、それは別の意味です。もちろん、日本の思想史で水戸学は初めてです。けれども、私の考えとしては、ことばはもちろん新しかったのですが、意味はあまり新しいくない。それを「国体」と名づけるのは水戸学のイメージだと思います。

たとえば、中世の習合の問題で『神皇正統記』を見ると、最初から中国のテーマが出てきます。吉田兼俱の『唯一神道名法要集』を見ると、そのなかでも中国の概念がよくわかります。内容は中世にもあったけれども、言葉は水戸学だと思います。

吉田神道のことで、たとえば、吉田神道は徳川時代までももちろん神仏習合でしたけれども、ほんとうにおもしろいですね。江戸時代に徳川幕府がはじまってから神儒一致にかわりました。吉田神道もそうです。そのときに、たとえば林羅山が『神道伝授』でよく書いたことですが、三種の神器は、儒教の一番大切な3つの徳と同じです。それで、神儒一致の思想は吉田神道のなかでも、一もちろん江戸時代の吉田神道です。江戸以前の吉田神道はちがいますが、一重要でした。

新田先生の最初の質問にあった教育勅語、それは私も一番おもしろい文献だと思います。もちろん、教育勅語にいろいろな思想を見つけることができます。特に儒教がよく書かれてありまして、五倫の概念。その後、西洋的な憲法的思想もあるし、その他は神道説が国体思想と名づけるのは恥ずかしいのですが、最初に一番大切なのは天皇の支配の正当化とか、教育勅語でもそうですよね。それで、教育勅語でいろいろな思想というのを全部ひとつにしたことはよくわかる。水戸学の思想は、はっきり言えば国学と儒教を一緒にしたのだと思います。その他は、もちろん洋学の憲法的な考え方。

さきほどのエバーソール先生の発表はほんとうにおもしろくて、それは近代化の問題ですね。私は、近代化は外国から日本に来たものだけではないと思います。国内の近代化もありました。その国内の近代化は、特に水戸学の思想で始まったのは、水戸学と国学、その社会哲学や社会思想で、日本国内の近代化ができたものです。そのために、明治維新に国内の近代化、外からきた近代化をあわせて、それで新しい日本の明治時代の制度ができたものだと思います。

【新田】最初におうかがいして、神道は天皇支配の正当化を神道のなかに位置づけるのかということをおうかがいしたのは、先生がとりあげている教育勅語のことで気になったことがあるので申し上げました。

それは、教育勅語が出された後に民間でさまざまな解説書が出されました。それは必ずしも天皇支配の正当化を儒教だけ、神道だけで説明していません。いろいろな解説書が出ます。儒教的に徳のある君主だからとか、あるいは仏教の因果応報で徳を積んで死んだのでこんどは君主に生まれる。だから、仏教家は従わなければいけないとか。さまざまな天皇の支配の正当化が行われています。そのことが、教育勅語が出たときに許されていたことの事実はひとつ大きくて、神道だけにそこを帰せられるのかなというのが1点です。

それから、国体ということばでいうと2つ気になるところがあります。神道側の議論だけに限ればそうかもしれませんが、近代史のなかでいくと国体概念というのは1つは主権論との関係が大きくなってきて、特に国体という言葉を表立って定めた治安維持法が議会で議論になって、その内容は何か。思想的なものまで含むのかということになると、つい宗教弾圧につながります。そのときの当局の答えは「天皇の統治権を否定しない」ということだけであって、なぜ否定しないかという思想まで踏み込まないというのが政府の立場でしたから、国体論のなかにそこまで神道的なものが読み込めるかということ。

それから、当時この議論があったときに内務省神社局というところで『国体論史』という資料集を出しています。それは近世から大正10年ぐらいまでの国体論のダイジェストを集めたものですが、その最後に清原貞雄という学者が解説を書いている、国体論を神話にもとづいて説くのは危うい。そういうことをすると、そういう迷信を信じる人は信じるだろうけれども、いまの国民にそんなことを言ってもしょうがないということ、内務省神社局の人が書いています。

そういう事実から見ると、先生のおっしゃっているように国体の議論がつねに神道的であったとか、連続性を保証するものであったということもなかなかいいがたいのではないかな。そういう意味で、非連続性という部分もあるのではないのでしょうか。それは仏教・儒教との習合は終わったかもしれませんが、その後、憲法論とか、国家社会主義であるとか、あるいはブロック経済の思想とか、そういうものとさまざまに国体は結びついていったので、そのあたりの議論を見ないと、単純に国体という言葉を使って神道の連続性をいうのは、近代にかぎったとしてもむずかしいかもしれないと思いますが、いかがでしょうか。

【司会】ちょっとアントーニさんの趣旨を誤解されているような気がします。つまり、これを読むと、むしろ国体とか天皇制とかというものがいろいろなものに支えられているわけですが、神道の政治的イデオロギーがどういうところに連続して見てとれるかというときに、一番抽出されてくるということであって、国体が神道だけで成り立っているという議論ではないと思います。

【新田】その場合に、水戸学から神道学者や神道思想家の議論でつないでいくのであれば、その議論でよろしいと思いますが。たとえば、ここで教育勅語という政府とか教育の立場を出す文書でそれをいおうとするならば、そこは必ずしもそうではないといわざるをえないのではないかと思います。

【アントーニ】難しいですが、それはたぶん定義の質問だと思います。神道の定義についていえば、私の発表では、神道の連続性を天皇支配の正当化の意味でとらえています。それは、もちろん定義だけです。神道については他の定義もいろいろあって、私ももちろん知っています。そのうえで、私の定義からいくと、教育勅語の内容は天皇についての内容は本当に神道だと思います。それも、大正時代までの国体論はもちろんです。美濃部達吉や穂積八束の問題はよく知られていますが、いつも天皇は憲法の中か外か、天皇は社会の中にあるか、という問題でした。それは、本当に宗教的な考え方の問題だと思います。

そのために、その内容は先に述べた点から神道だということができると思います。私が

ほんとうに興味をもっていることは宗教と政治の関係です。それは日本だけではなくて、どこにも宗教は政治的なことと関係があると思います。それも、ヨーロッパはもちろんそうですが、キリスト教のことについて話したときに、ローマ帝国に見るとローマ帝国末期にキリスト教は特に政治的な意味があった。それは、ヨーロッパの中世の皇帝支配は特に政治宗教的なことでした。どこでも宗教には政治的な軋轢があると思います。

日本宗教史を見ると、たとえば禅、五山を見ると足利幕府と親しい関係があつて、ここにも政治と宗教の関係がみられると思います。

【ランベッリ】興味深くうかがいました。まとめのところに、連続性の核心をなすのは『古事記』や『日本紀』の時代以来、神道が天皇家の支配的な地位を正当化する役割を果たしてきたということですね。つまり、神道の連続性があるとしたら、天皇家の支配的な地位を正当化する役割を果たしたということですけど、そうすると、天皇が先生の論理のなかで中心的な役割を果たすわけです。

私が気になったのは、天皇家はほんとうに『古事記』の時代以来、いままで支配的な地位に立っていたのですか。これは私の考える一番根本的な問題ですね。つまり、前から思っている疑問ですが、戦時中のイデオロギーを鵜呑みにしてしまうような考え方なのではないのか。逆に言うと、天皇がほんとうの意味の支配的な立場に立っていたのは、日本の歴史のなかではかなり例外的な時期だったのではないか。

もうひとつ、たとえば、1200年代から明治天皇のお父さんの孝明天皇まで、天皇の正当性の基盤になっていたのは神道というよりも、仏教の即位灌頂なんですよ。つまり「天皇」から仏教的に定義された「国王」ということにされたわけですが。そういう意味で、神道だけが天皇の存在意義の根拠になるわけではないのかなとも考えられるのですが、いかがでしょうか。

もうひとつ、中世の神国の思想とか、それもまた天皇制の正当化につながりますが、中世の神国思想は明らかに仏教者のつくった思想なので、天皇を支えるための目的ではなくて、寺社の権力を支えるためのひとつの戦略だった。これは黒田俊雄先生の説ですが、天皇とはほとんど関係ないわけです。ですから、神道の歴史のなかに天皇という存在はほんとうにそれほど重要なのか。半分挑発的にうかがってみたいのですが、いかがでしょうか。

【アントーニ】もちろん、古代と現代の連続はまっすぐな連続ではないと私も思います。もちろん、平安時代から中世まで天皇の支配はイデオロギー上のものだけで、ほんとうの支配は幕府ですが、その考え方はまだ続いていたと思います。たとえば、この前の発表で平安時代の延喜式の神社は制度だけであったという説明を聞きましたが、私もそれは疑いますが、その制度の後ろに何の考えがあつたのかという疑問があるのです。考えなしで、哲学なしで、思想なしでの制度は存在しないでしょう。もちろん、延喜式を見ると特に神社制度ですが、その制度の背後は国家のイメージです。その国家はもちろん、律令国家の考えです。その律令国家の中に支配の正当化の考え。その延喜式を見るとき、その考え方を知らないと延喜式の制度はぜんぜんわからないと思います。

もちろん、神道はシステムということで、そのシステムはいろいろな時代にいろいろな

ことがありました。仏教とキリスト教や他の制度と同じです。しかし、システムとしての神道は19世紀にようやく始まった、という説、その新しい説明は、私も信じない。神道は制度として7世紀か8世紀、とにかく7世紀に始まった律令国家と同じで中国化の時代につくられた思想制度、宗教制度です。

中世の神国思想、もちろんそのとき神国のことについて、天皇に関してはあまりないですけれど、神道五部書、度会神道の文献ではそうでしょうが、伊勢外宮だけではなく内宮の考え方はちょっと違うかもしれない。伊勢外宮をとりまく問題は、度会神道の発生によって大切でしょうけれども、外宮は豊受大神が祭神ですが、内宮は天照大神ですね。天照大神については本居宣長の国学が論じていますが、中世でも内宮には天照大神と天皇の関係について大切な思想がありました。たとえば、三輪神話で崇神天皇の時代まで、三輪で天照大神をおまつりしていたのですけれど、その後五十鈴川のほとりにうつりました。『倭姫命世紀』の話ですね。そのときにも天照大神は、天皇制か、天皇イデオロギーかわからないけれども、その関係がありました。もちろん、中世から度会神道、外宮神道では神仏習合のほうが重要になりました。それは中世の発展だけだと思います。近世はまた違って、近世は神仏習合ではない。近世は神儒一致です。けれども、ひとつの連続は天皇制、一天皇イデオロギーというほうがいいのでしょうか、—この考えとしては律令時代から続いていると考えられます。

【司会】これは大きな問題ですね。時間がだいぶ過ぎましたので、総括討論にこの部分はまた引き続いていきたいと思います。要は、これは中世の評価ということになるかと思っています。中世のいわば仏教優位で、極端に言えば神道はないととらえられる時代という立場もあります。しかし、神祇制度その他は続いているわけですから、ちゃんとあるわけです。天皇との位置づけもそれなりの連続性はあるという立場、いろいろあると思います。これは最後のところでもう一回川村さんのコメントを得てから、皆さんにいろいろご意見をたまわるにふさわしいテーマかと思いますので、理論的な準備をしていただいて総括討論にのぞんでいただければと思います。

とりあえず、このセッションはおしまいにさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

¹ 本稿のより詳細なドイツ語版については Antoni (2001)、またこのテーマ全体についての精緻な議論は Antoni (1998)を参照。

² Hammitzsch (1981), 1633

³ Miyasaka (1994), S. 236, Anm. 214

⁴ 日本中世の宗教的「習合」については久保田(1989)、Matsunaga(1969)、Naumann(1994)を参照。

⁵ 大林(1982) 135 ページ。

⁶ 支配者の理想像についての日本と中国の違いについては、特に Kemper(1967)を参照。

⁷ この考えは既に日本の推古天皇が中国の皇帝に送った有名な書簡の中の「東天皇敬白西皇帝」という呼びかけに表わされている。『日本書紀』推古天皇 16 年 9 月『日本古典文学大系』67 192

頁、また Nell(1998) S. 50 参照。

⁸統治の神勅は『日本書紀』（『日本古典文学大系』 67 147 頁）、『古事記』（『日本古典文学大系』 1 126/127 頁）及び『古語拾遺』（『群書類従』 第 25 輯 5 頁、Florenz 1919, S. 246）に伝わっている。但し伝承の本質的な詳細は註釈では触れられていない。唯一『日本書紀』の異本と思われる文献に天皇の血筋に永遠の支配が委ねられた旨記されている。他の本ではただアマテラスがその孫ニニギに直接委託したことだけが知れる。Antoni(1998) S. 77, Anm. 48 参照。

⁹ Naumann (1970), S. 13 参照。

¹⁰ 日本の神道の人間観については Antoni (1991) S. 60-75 参照。

¹¹ 梶山・阪本 (1994)、阿部 (1972)、Boot (1992)、岸本 (1972[1993]) 47-69, Kracht (1986)、及び史料集として『日本思想体系』第 39 巻 (1972) 9-262 頁、『古事類苑』神祇部 2・44 神道 下 1359-1455 頁参照。

¹² このことを別にすれば礼拝と地方的な神社のレベルでは神道＝仏教的な神社寺院複合体である「神宮寺」が明治維新の過程での暴力的な神仏分離に至るまで存在し続けた。江戸時代の「神宮寺」については特に Seckel (1985) S. 29f., 74-77 を参照。

¹³ 岸本 (1972[1993]) 49-58 頁、梶山・阪本 (1994) 16 頁。

¹⁴ 中世の度会神道についての入門書として特に Teeuwen (1996)、Naumann (1994) S. 29-56、Picken (1994) S. 306-310、岸本 (1972) 31-37 頁、また Teeuwen (1993) 参照。

¹⁵ Antoni (1998) Kap. II. 2.2.1.2.2. 参照。

¹⁶ 梶山・阪本 (1994) 17 頁参照。

¹⁷ 荷田春満については Dumoulin (翻訳) (1940)、中村 (1984)。

¹⁸ 賀茂真淵の生涯と著作については Heinrich Dumoulin の仕事 (1939b, 1941a, b, 1943a, b, 1953, 1955, 1956a, b) を参照。

¹⁹ 本居宣長については特に Brownlee (1988)、Alessandro (1964)、Dumoulin (1939a)、日野 (1983)、Matsumoto (1970) を参照。本居宣長『古事記傳』、Nishimura (1987, 1991)、Satō-Diesner (1977)、Scolte (1939)

²⁰ 平田篤胤の生涯、著作、政治的意義については、特に三木 (1990)、田原 (1990[1963])、渡邊 (1978)、Keene (1953, 1978)、Schiffer (1939)、Hammitzsch (1936)、Devine (1981)、Odronec (1967) を参照。

²¹ 平田篤胤「古道大意」『平田篤胤全集』第 8 巻 29、51、69 頁、Hammitzsch (1936) S. 20ff、また Antoni (1991) S. 66 参照。

²² 特に Antoni (1987, 1991, 1998) 参照。

²³ Stanzel (1982) S. 53-55、日本のアイデンティティ論争については Naumann (1987) をも参照。

²⁴ Meyer によれば、孝明天皇は 1853 年 12 月に幕府に対し、開国に関する米国大統領との往復書簡の問題は、国と神々にとっての重大事件であり、民心の騒擾によって国に無秩序がもたらされ、国体（強調は筆者による）がないがしろにされることを望まないとはっきり述べている。（Meyer 1997, S. 135）従来の研究では「国体」概念が当時はまだ国学思想家の思弁に止まっていたということを前提にしているが、この点については再考する必要があるだろう。（Meyer 1997, S. 140f. Anm. 23 をも参照。）

²⁵ 平田は「真の神道」が日本の「国体」の中に体现されていると考えている。（Schiffer 1939, S. 227）「神道と申にも、種々有之候。第一ニ眞實の神道と申候は、前ニ申候通り、神國の神國たる御國祿を知り、神の成置玉へる事を、習ひ學びて、正き人の道を行ひ候を、實の神道と称し候。すべて世の忠臣孝子、其他人の道ニ外れざる者ハ、皆眞の神道にて候。又俗ニ儒佛の道と、並べ唱候神道は、甚賤きものにて、多くハ神を賣物にして、金銀を貪り、御國祿の事などハ、夢にも知らぬ者ニ候。」平田篤胤「大道或問」『平田篤胤全集』第 8 巻 87-88 頁、Schiffer 1939, S. 227

²⁶ 『新論』については特に Stanzel (1982) を参照。

²⁷ 大久保 (1969) 425 ページ。

²⁸ Antoni (1998) S. 170。水戸学の思想についての入門としては特に今井 (1972)、Koschmann

(1987)、Kracht (1975)、Webb (1958)を参照。

²⁹既に『日本書紀』(雄略天皇 23 年 8 月 7 日)の中に主君-家臣関係と父-子関係を比較する記述が存在する。但し両者が実際に等置されるのは 19 世紀の「国体」イデオロギーにおいてである。Lokowandt (1978) S. 60ff、Tsurumi (1970) S. 103-109、Fridell (1970) S. 828-833、Bellah (1985) S. 104、van Straelen (1952) S. 83

³⁰明治時代の宗教とイデオロギーについての入門としては Carol Gluck (1985)及び Harry Harootunian (1995)の研究をも参照。

³¹文部省『国体の本義』(1937)、Gauntlett/Hall (1949)参照。部分訳として Tsunoda 他 (1964) II S. 278-288、Wittig (1976) S. 127-130 (Dok. Nr. 33)、また Antoni (1998) S. 219 及び Miller (1982) S. 92 参照。

³²19 世紀末から 20 世紀初頭の日本には、日本的倫理の基礎づけのため、国民道德という学術上独自のジャンルが存在した。中でも著名な哲学者にして国家主義的理論家であった井上哲次郎のものは最も影響力が大きかった。Antoni (1990, 1998)及び Nawrocki (1998)参照。

³³井上哲次郎における「国体」神道の概念については Nawrocki (1998) S. 152-158, 162f, 220f、Antoni (1998) S. 229; 274-277, 309; 330 を参照。また Gerhard Rosenkranz (1944)もこの概念を使っている。(S. 100) (Antoni 1998, S. 309 参照)

³⁴Antoni (1991) S. 24

参考文献一覧

*阿部 (1972)

阿部秋生「儒家神道と国学」平・阿部編『日本思想体系 39 近世神道と国学』(岩波書店) 所収 1972 年 497-506 頁

*井上順孝他編集委員 国学院大学日本文化研究所編『神道事典』 弘文堂 1994 年

*井上哲次郎『日本陽明學派之哲學』東京 富山房 1897 年

*同 『訂正増補日本古學派之哲學』東京 富山房 1918 年

*同 『訂正増補日本朱子學派之哲學』東京 富山房 1945 年

*今井 (1972)

今井宇三郎他編 「水戸學」『日本思想大系 53』東京 岩波書店 1972 年

*大久保 (1969)

大久保利謙他編『近代史史料』東京 吉川弘文館 1969 (1965)年

*大林 (1973)

大林太良『日本神話の起源』東京 角川書店 1973 年

*同 *Ise und Izumo: Die Schreine des Schintoismus*. [Die Welt der Religionen: vol. 6] Freiburg, Basel, Wien: Herder, 1982.

*同 『神話の系譜：日本神話の源流をさぐる』東京 青土社 1986 年

*同 “Der Ursprung der shintōistischen Hochzeit”, in: Antoni (1997a), pp. 39-48.

*岸本 (1993 [1972])

- 岸本芳雄『神道入門-神道とそのあゆみ』東京 建帛社 1993 [1972]年
- *久保田 (1989)
久保田収『中世神道の研究』京都 神道史学会 1989年
- *『群書類従』
塙保己一(編)『群書類従』30輯 続群書類従完成会 1959-60年(第3版)
- *「古語拾遺」『群書類従 第25輯』東京 続群書類従完成会
- *「古事記」『日本古典文学大系』1
- *『古事類苑』
神宮司庁蔵版『古事類苑』51巻 リプリント 東京 吉川弘文館 1977年
- *梶山・阪本(1994)
梶山林継・阪本是丸「近世の神道」井上他編『神道事典』(1994)所収、13-18頁
- *平重道・阿部秋生(編)『近世神道論前期国学』東京 岩波書店 (『日本思想大系 39』)
1972年
- *高木市之助他編『日本古典文学大系』102 東京 岩波書店 1957-86年
- *田原 (1990 [1963])
田原嗣郎『平田篤胤』(人物叢書 111) 東京 吉川弘文館 1990[1963]年
- *中村 (1984)
中村啓信: "The Kojiki with Revisions Added by Kada no Azumamaro", in: *Nihon bunka kenkyûsho kiyô* 日本文化研究所紀要, vol. 54 (1984), pp. 128-242.
- *『日本書紀』
「日本書紀」上『日本古典文学大系』67
- *日野 (1983)
日野龍夫(校注)『本居宣長集』新潮日本古典集成 第60回 東京 新潮社 1983年
- *平田篤胤「古道大意」『平田篤胤全集 第8巻』東京 名著出版 1976年 11-71頁
- *同 「大道或問」『平田篤胤全集 第8巻』東京 名著出版 1976年 77-93頁
- *松村武雄『日本神話の研究』4冊 東京 培風館 1954-58年
- *三木 (1990)
三木正太郎『平田篤胤の研究』神道史学会 (神道史叢書第5巻) 臨川書店 1990 [1969]年
- *源了圓『徳川思想小史』(中公新書) 東京 中央公論社 1992 (1973)年
- *村山修一『本地垂迹』東京 吉川弘文館 1972年
- *本居宣長「古事記傳」『本居宣長全集 第1巻』東京 吉川弘文館 1919-27年
- *文部省『国体の本義』東京 1937年
- *渡邊 (1978)
渡邊金造『平田篤胤研究』東京 鳳出版 1978年

* Alessandro (1964)

Allessandro, Casero: *Das Naga no Hire des Ichikawa Kakumei Tazumaro: Eine kritische Auseinandersetzung mit der Wissenschaftsauffassung des Motoori Norinaga*. [M.A. Thesis] München: Universität München, 1964.

* Antoni (1987)

Antoni, Klaus: "Kokutai – Das 'Nationalwesen' als japanische Utopie", in: *Saeculum – Jahrbuch für Universalgeschichte*, vol. 38/2-3 (1987), pp. 266-311.

* — (1990)

Antoni, Klaus: "Inoue Tetsujirō und die Entwicklung der Staatsideologie in der zweiten Hälfte der Meiji-Zeit", in: *Oriens Extremus*, 33rd year, no. 1 (1990), pp. 99-116.

* — (1991)

Antoni, Klaus: *Der Himmlische Herrscher und sein Staat: Essays zur Stellung des Tennō im modernen Japan*. München: iudicium, 1991.

* — (1992)

Antoni, Klaus: "Tradition und 'Traditionalismus' im modernen Japan: Ein kulturanthropologischer Versuch", in: Deutsches Institut für Japanstudien (ed.): *Japanstudien: Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung*, vol. 3 (1992), pp. 105-128.

* — (1997)

Antoni, Klaus (ed.): *Rituale und ihre Urheber: 'Invented Traditions' in der japanischen Religionsgeschichte*. [Ostasien – Pazifik. Trierer Studien zu Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur; vol. 5] Hamburg: Lit-Verlag, 1997.

* — (1998)

Antoni, Klaus: *Shintō und die Konzeption des japanischen Nationalwesens (kokutai): Der religiöse Traditionalismus in Neuzeit und Moderne Japans*. [Handbuch der Orientalistik, part V, vol. 8] Leiden: Brill, 1998.

* — (2001)

Antoni, Klaus: "Shintō", in: Kracht, Klaus/ Rüttermann, Markus (eds.): *Grundriß der Japanologie*. [Izumi – Quellen, Studien und Materialien zur Kultur Japans; vol. 7] Wiesbaden: Harrassowitz, 2001, pp. 115-147.

* Bargatzky (1997)

Bargatzky, Thomas: *Ethnologie: Eine Einführung in die Wissenschaft von den unproduktiven Gesellschaften*. Hamburg: Buske, 1997.

* Bellah (1985)

Bellah, Robert Neelly: *Tokugawa Religion: The Cultural Roots of Modern Japan*. New York: Free Press, 1985 [1957].

* Boot (1992)

Boot, Willem Jan: *The Adoption and Adaptation of Neo-Confucianism in Japan: The Role of Fujiwara Seika and Hayashi Razan*. [Ph. Diss.; 2nd ed.] Leiden: Rijksuniv., 1992.

* Brownlee (1988)

Brownlee, John: "The Jeweled Comb-Box: Motoori Norinaga's 'Tamakushige'", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 43/1 (1988), pp. 35-61.

* Devine (1981)

Devine, Richard: "Hirata Atsutane and Christian Sources", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 36/1 (1981), pp. 37-54.

* Dumoulin (1939a)

Dumoulin, Heinrich: "Motoori Norinaga", in: *Nippon*, vol. 5 (1939), pp. 193-197.

*- (1939b)

Dumoulin, Heinrich: "Kamo Mabuchi: 'Kokuikô'. Gedanken über den 'Sinn des Landes'", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 2/1 (1939), pp. 165-192.

*- 1940

Dumoulin, Heinrich: "Sô-gakkô-kei: Kada Azumamaro's Gesuch um die Errichtung einer Kokugaku-Schule", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 3/2 (1940), pp. 590-609.

*- (1941a)

Dumoulin, Heinrich: "Zwei Texte zum Kadô des Kamo Mabuchi: 'Uta no kokoro no uchi' - 'Niimanabi' [part I]", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 4/1 (1941), pp. 192-206.

*- (1941b)

Dumoulin, Heinrich: "Zwei Texte zum Kadô des Kamo Mabuchi: 'Uta no kokoro no uchi' - 'Niimanabi' [part II]", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 4/2 (1941), pp. 566-584.

*- (1943a)

Dumoulin, Heinrich: "Die Erneuerung des Liederweges durch Kamo Mabuchi", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 6 (1943), pp. 110-145.

*- (1943b)

Dumoulin, Heinrich: Kamo Mabuchi (1697-1769): *Ein Beitrag zur japanischen Religions- und Geistesgeschichte*. [Monumenta Nipponica Monographs, no. 8] Tôkyô, Sophia University, 1943.

*- (1953)

Dumoulin, Heinrich: "Kamo Mabuchi und das 'Manyôshû'", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 9/1 (1953), pp. 34-61.

*- (1955)

Dumoulin, Heinrich: "Zwei Texte Kamo Mabuchis zur Wortkunde", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 11/3 (1955), pp. 268-283.

*- (1956a)

Dumoulin, Heinrich: "Kamo Mabuchis Erklärung des Norito zum Toshi-goi-no-matsuri [part I]", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 12/1-2 (1956), pp. 121-156.

*- (1956b)

Dumoulin, Heinrich: "Kamo Mabuchis Erklärung des Norito zum Toshigoi-no-matsuri [part II]", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 12/3-4 (1956), pp. 269-298.

* Florenz (1919)

Florenz, Karl: *Die historischen Quellen der Shinto-Religion: Aus dem Altjapanischen und Chinesischen übersetzt und erklärt von Dr. Karl Florenz*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1919.

* Fridell (1970)

Fridell, W. M.: "Government Ethics Textbooks in Late Meiji Japan", in: *The Journal of Japanese Studies*, vol. 29/4 (1970), pp. 828-833.

* Gauntlett/ Hall (1949)

Gauntlett, J. O./ Hall, R. K. (transl.): *Kokutai no hongi: Cardinal Principles of the National Entity of Japan*. Cambridge: Harvard University Press, 1949.

* Gluck (1985)

Gluck, Carol: *Japan's Modern Myths. Ideology in the Late Meiji Period*. Princeton: Princeton University Press, 1985.

* Haekel (1971)

Haekel, Josef: "Religion", in: Trimborn, Hermann (ed.): *Lehrbuch der Völkerkunde*. 4th ed., Stuttgart: Ferdinand Enke Verlag, 1971.

* Hammitzsch (1936)

Hammitzsch, Horst: "Hirata Atsutane: Ein geistiger Kämpfer Japans", in: *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, vol. 28, part E (1936), Tōkyō: OAG, pp. 1-27.

*- (1981)

Hammitzsch, Horst et al. (ed.): *Japan-Handbuch*. Wiesbaden: Franz Steiner, 1981.

* Harootunian (1988)

Harootunian, Harry D.: *Things Seen and Unseen: Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism*. Chicago: University of Chicago Press, 1988.

*- (1995)

Harootunian, Harry D.: "Late Tokugawa Culture and Thought", in: Jansen, Marius B. (ed.): *The Emergence of Meiji Japan*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995, pp. 53-143.

* Hobsbawm/ Ranger (1983)

-
- Hobsbawm, Eric/ Ranger, Terence (ed.): *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press, 1983.
- * Keene (1953)
Keene, Donald: "Hirata Atsutane and Western Learning", in: *Young Pao*, vol. 42 (1953), pp. 353-380.
- * - (1978)
Keene, Donald: *Some Japanese Portraits*. Tôkyô: Kodansha, 1978.
- * Kemper (1967)
Kemper, Ulrich: Arai Hakuseki und seine Geschichtsauffassung: *Ein Beitrag zur Historiographie Japans in der Tokugawa-Zeit*. Wiesbaden: Harrassowitz, 1967.
- * Koschmann (1987)
Koschmann, J. Victor: *The Mito Ideology: Discourse, Reform and Insurrection in Late Tokugawa Japan, 1790-1864*. Berkeley: University of California Press, 1987.
- * Kracht (1975)
Kracht, Klaus: Das Kôdôkanki-Jutsugi des Fujita Tôko: *Ein Beitrag zum politischen Denken der Späten Mito-Schule*. Wiesbaden: Harrassowitz, 1975.
- * - (1986)
Kracht, Klaus: *Studien zur Geschichte des Denkens im Japan des 17. bis 19. Jahrhunderts: Chu-Hsi-konfuzianische Geist-Diskurse*. [Veröffentl. des Ostasien-Instituts der Ruhr-Universität Bochum, vol. 31] Wiesbaden: Harrassowitz, 1986.
- * Krusche (1990)
Krusche, D.: *Hermeneutik der Fremde*. München: iudicium, 1990.
- * Krusche/ Wierlacher (1985)
Krusche, D./ Wierlacher, Alois (ed.): *Literatur und Fremde: zur Hermeneutik kultur-räumlicher Distanz*. München: iudicium, 1985.
- * Lokowandt (1978)
Lokowandt, Ernst: *Die rechtliche Entwicklung des Staats-Shintô in der ersten Hälfte der Meiji-Zeit, 1868-1890*. (Studies in Oriental Religions, vol. 3). Wiesbaden: Harrassowitz, 1978.
- * Matsumoto (1970)
Matsumoto, Shigeru: *Motoori Norinaga 1730-1801*. Cambridge: Harvard University Press, 1970.
- * Matsunaga (1969)
Matsunaga, Alicia: *The Buddhist Philosophy of Assimilation: The Historical Development of the Honji-Suijaku Theory*. Tôkyô: Sophia University Press, 1969.
- * McNally (1998)

-
- McNally, Mark Thomas: *Phantom History: Hirata Atsutane and Tokugawa Nativism*. [Ph. Diss.] UMI: University of California, 1998.
- * Meyer (1998)
 Meyer, Eva-Maria: *Japans Kaiserhof in der Edo-Zeit: Unter besonderer Berücksichtigung der Jahre 1846 bis 1867*. (Ostasien-Pazifik: Trierer Studien zu Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur: vol. 12). Hamburg: Lit-Verlag, 1998.
- * Miller (1982)
 Miller, Roy Andrew: *Japan's Modern Myth: The Language and Beyond*. New York: Weatherhill, 1982.
- * Miyasaka (1994)
 Miyasaka, Masahide: *Shintô und Christentum: Wirtschaftsethik als Quelle der Industriestaatlichkeit*. Paderborn: Bonifatius, 1994.
- * Naumann (1970)
 Naumann, Nelly: "Einige Bemerkungen zum sogenannten Ur-Shintô", in: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens/ Hamburg*, vol. 107/108 (1970), pp. 5-13.
- * - (1971)
 Naumann, Nelly: *Das Umwandeln des Himmelspeilers: Ein japanischer Mythos und seine kulturhistorische Einordnung*. [Asian Folklore Studies Monograph, No. 5] Tôkyô, 1971.
- * - (1985)
 Naumann, Nelly: "Shintô und Volksreligion: Japanische Religiosität im historischen Kontext", in: *Zeitschrift für Missions- und Religionswissenschaft*, vol. 69 (1985), pp. 223-242.
- * - (1987)
 Naumann, Nelly: "Identitätsfindung – das geistige Problem des modernen Japan", in: Martin, Bernd (ed.): *Japans Weg in die Moderne: Ein Sonderweg nach deutschem Vorbild?*. Frankfurt, New York: Campus, 1987, pp. 173-192.
- * - (1988)
 Nelly Naumann: *Die einheimische Religion Japans, Teil 1: Bis zum Ende der Heian-Zeit*. [Handbuch der Orientalistik, part V, vol. 4, sect. 1, no. 1] Leiden: Brill, 1988.
- * - (1994)
 Nelly Naumann: *Die einheimische Religion Japans, Teil 2: Synkretistische Lehren und religiöse Entwicklungen von der Kamakura bis zum Beginn der Edo-Zeit*. [Handbuch der Orientalistik, part V, vol. 4, sect. 1, no. 2] Leiden: Brill, 1994.
- * - (1996)
 Naumann, Nelly: *Die Mythen des alten Japan: Übersetzt und erläutert von Nelly Naumann*.

München: Beck, 1996.

* Nawrocki (1998)

Nawrocki, Johann: *Inoue Tetsujirō (1855-1944) und die Ideologie des Götterlandes: Eine vergleichende Studie zur politischen Theologie des modernen Japan*. [Ostasien-Pazifik: Trierer Studien zu Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur; vol. 10]. Hamburg: Lit-Verlag, 1998.

* Nell (1998)

Nell, Stephanie: *Die Rezeption des Buddhismus im Spiegel des Nihonshoki: Eine kritische Analyse ausgewählter Textpassagen von Kimmei-Tennō bis Suiko-Tennō*. [M.A.-Thesis] Universität Trier, 1998.

* Nishimura (1987)

Nishimura, Sey: "First Steps into the Mountains: Motoori Norinaga's 'Uiyamabumi'", in: *Monumenta Nipponica*, 42/4 (1987), pp. 449-493.

*- (1991)

Nishimura, Sey: "The Way of the Gods: Motoori Norinaga's 'Naobi no Mitama'", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 46/1 (1991), pp. 21-41.

* Nosco (1984)

Nosco, Peter: "Masuho Zankō (1655-1742): A Shinto Popularizer between Nativism and National Learning", in: Nosco, Peter (ed.) *Confucianism and Tokugawa Culture*. Princeton: Princeton University Press, 1984, pp. 166-187.

*- (1990)

Nosco, Peter: *Remembering Paradise: Nativism and Nostalgia in Eighteenth-century Japan*. [Harvard-Yenching Institute Monograph Series; no. 31] Cambridge: Harvard University Press, 1990.

* Odronic (1967)

Odronic, Walter J.: *Kodō Taii (An outline of the Ancient Way): An annotated translation with an introduction to the Shinto Revival Movement and a sketch of the life of Hirata Atsutane*. [Ph. Diss.] UMI: University of Pennsylvania, 1967.

* Ooms (1985)

Ooms, Herman: *Tokugawa Ideology: Early Constructs, 1570-1680*. New Jersey: Princeton University Press, 1985.

* Picken (1994)

Picken, Stuart D. B.: *Essentials of Shinto: Analytical Guide to Principal Teachings*. [Resources in Asian Philosophy & Religion Series] Westport, Conn.: Greenwood, 1994.

* Rosenkranz (1944)

Rosenkranz, Gerhard: *Der Weg der Götter (Shintō): Gehalt und Gestalt der japanischen*

Nationalreligion. München: Arbeitsgemeinschaft für Zeitgeschichte, 1944.

* Rothermund (1989)

Rothermund, Dietmar: "Der Traditionalismus als Forschungsgegenstand für Historiker und Orientalisten", in: *Saeculum – Jahrbuch für Universalgeschichte*, vol. 40/2 (1989), pp. 142-148.

* Satô-Diesner (1977)

Satô-Diesner, Sigmara: *Motoori Norinaga: Das Hihon tamakushige. Ein Beitrag zum politischen Denken der Kokugaku*. [Ph. Diss.] Universität Bonn, 1977.

* Schiffer (1939)

Schiffer, Wilhelm: "Hirata Atsutane: Taidô Wakumon – Es fragte einer nach dem Grossen Weg...", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 2 (1939), pp. 212-236.

* Seckel (1985)

Seckel, Dietrich: *Buddhistische Tempelnamen in Japan*. [Münchener Ostasiatische Studien, vol. 37] Stuttgart: Steiner, 1985.

* Smith (1973)

Smith, Warren: *Confucianism in Modern Japan: A Study of Conservatism in Japanese Intellectual History*. Tôkyô: Hokuseido Press, 1973.

* Stanzel (1982)

Stanzel, Volker: *Japan – Haupt der Erde: Die Neuen Erörterungen' des Philosophen und Theoretikers der Politik Seishisai Aizawa aus dem Jahre 1825*. Würzburg: Königshausen & Neumann, 1982.

* Stolte (1939)

Stolte, Hans: "Motoori Norinaga: 'Naobi no Mitama' – Geist der Erneuerung", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 2/1 (1939), pp. 193-211.

* Teeuwen (1993)

Teeuwen, Mark: "Attaining Union with the Gods: The Secret Books of Watarai Shintô", in: *Monumenta Nipponica*, vol. 48/2 (1993), pp. 225-245.

* – (1996)

Teeuwen, Mark: *Watarai Shintô: An Intellectual History of the Outer Shrine of Ise*. [CNWS Publications, vol. 52]. Leiden: Research School CNWS; School of Asian, African, & Amerindian Studies, 1996.

* Thiel (1984)

Thiel, Josef Franz: *Religionsethnologie: Grundbegriffe der Religionen schriftloser Völker*. [Collectanea Instituti Anthropos, vol. 33] Berlin: Dietrich Reimer, 1984.

* Tsunoda (1964)

Tsunoda, Ryusaku et al. (ed.): *Sources of Japanese Tradition*. 2 vol., New York: Columbia

University Press, 1964.

*Tsurumi (1970)

Tsurumi, Kazuko: *Social Change and the Individual: Japan Before and after Defeat in World War II*. Princeton: Princeton Univ. Press, 1970.

*van Straelen (1952)

van Straelen, Henry: *Yoshida Shōin: Forerunner of the Meiji-Restoration*. Leiden: Brill, 1952.

*Webb (1958)

Webb, Herschel F.: *The Thought and Work of the Early Mito School*. [Ph. Diss.] UMI: Columbia University, 1958.

*Wittig (1976)

Wittig, Horst E.: *Pädagogik und Bildungspolitik Japans: Quellentexte und Dokumente von der Tokugawa-Zeit bis zur Gegenwart*. München: Reinhardt, 1976.

*日本文作成に当たって、牟田和男氏の協力を得たことに感謝したい。